

人達が集まつて墳墓の祭りも行われたものと思われる。

書紀の崇神天皇の条には「日は人づくり、夜は神づくり」と見られるが如く、古墳に對して、「死者を葬る穢れた場所」と云う意識は見られないで「祖先代々を祭る墓」としての意識が持たれたのではないかと思われる。

亦寺院の殆んどは氏族によつて建立された氏寺と云う形態をとり、寺院の持つ性格の一端がうかがえるのである。

では寺院の持つ意味を文献の上から見ると書紀の用明天皇から持統天皇の間に仏教に就いて一五三項目の記事が書かれている。その中で儀式としての記事で目的（願望）が解るのを要約すると、祖先供養（崇拜）護國、戦勝、災難消除、雨乞、病氣平癒祈願等であり、此れらから推察するに仏教渡来以前の在来の宗教儀礼にも以上の願望を持つものが存在したと考えられる。特に此の中に於て祖先供養の占める記事が多い。亦造寺、造像に就いてみると、粟原序鑪盤銘、高田屋結諺碑、法隆寺釈迦造像記、法隆寺旧釈迦諸像記等に見られるが如く、同様にその目的は祖先供養（崇拜）の對象となつてゐる。

書紀の崇峻天皇元年の条に、百濟より仏舎利の献上があり、推古天皇元年の条に、仏舎利を法興寺の刹柱の礎の中に置いた記事がある。此の舎利を坪井清足著の「飛鳥寺」に於いての記事に、埋葬されていた品部や規模が全く後期古墳時代のもものと類似するとされているところから、「古墳」の持つ意味と「寺院」の持つ意味が似通つてゐることは別に疑問のはさむところがないのである。

故に氏族集団が爲した古墳に於ける宗教儀礼と古墳の築営はやがて寺院建立と云う方向に進み、飛鳥時代の寺院は旧来固有の我國の文化と新来の仏教文化との融合が生じ、此の兩者の性格を兼ね備えたものとして、地上に姿を見せはじめたものであると考えられるのである。

仏教福祉学専攻

都市に於ける老人問題の一考察

京都市の実態を中心とした

老人と家族について

日本社会の近代化への脱皮は言うまでもなく戦後のこととある。そして社会が近代化することによって、老人問題は大きく社会問題としてクローズアップされてきた。それまでは前近代的家族制度の存在のため、老人問題は表面に現われることは少なかった。しかし社会が近代化することによって、私的扶養は衰退化し、老人の生活は不安定なものとなった。その大きな原因は、戦後の民主革命、社会変革——社会、経済、文化機構等——の近代的变化である。これらの変化が戦後の混乱した社会に急速に進展したため、そこから生ずる新旧の対立や混乱は老人の物質的、精神的生活に大きな影響を与えたのである。ことに日本社会では歴史的にも老人と家族とは密接な関係を持っていた。また老人の年令的特性（老化現象等）により、行動や活動範囲は年令とともに家族集団に減少されるため、老人と家族との関係はきわめて密接である。

民法改正に伴う前近代的家族制度の崩壊は、老人の家長的地位を失墜させると同時に、長子に課せられた扶

養義務は解かれた。しかし、新民法第八七七条に扶養の義務が定められているが、「だれ」という明確に定められた扶養義務者を持たないため、老人の生活は心理的にも物質的にも不安定な状態におかれている。更に、近代資本主義の発達は家族を地理的にも職業的にも分散せしめ、小家族化させた。そして夫婦中心とする世帯を基本単位とする考えが普及したため、一層不安定なものとした。このような社会での親子関係は、ただ親子という情愛を唯一の理由とした「金銭的」なつながりとして存在するのみで夫婦単位とする近代家族では、親のいる余地はなく、親はもはや若い世代の構成する家族の一員でもなければ、家族内で役立つ存在でもない。心理的、家計的負担となる存在なのである。要するに前近代的家族制度は老人にとつて生活保障の場であつたが、社会が近代化すれば、かつてのように老人は若い世代の生活上に權威を保ち、扶養の享受を期待することは困難となり、例外的なものとなる。そして私的扶養に代つて公的扶養に移行していくようになる。これが福祉国家の姿である、そして福祉国家の見本とされているイギリスにおいて、

近年、家族の重要性が再認識され、「三代家族」という形態を採用し、奨励されてきている。しかるに我國では家族から老人を排除しようとする傾向があり、老人と家族形態を考察することはきわめて興味深い問題であり、また老人の福祉にも重要な問題である。

一般に日本の老人家族は圧倒的に同居形態が支配しており、京都市の実態から——同居七一%、別居一五%弱——同居の多いことが窺える。しかしながら同居形態が多いから支持すべきだとは言えない。そこには世代間の心理的葛藤が生じやすく、家族問題の比重は、親子間のテンションが大きさを占めている。では、イギリスの三代家族とはどのようなものだろうか、確かに形態上は日本の同居形態と類似している。しかしそこには、根本的に相違点を見い出すことが出来る。即ち、イギリスでは民主主義や自田主義が国民の中に浸透しており、生活保障が確保され、別居が一般化しているその中の三代家族なのである。つまり別居形態から生ずる心理的孤立を防ぐ為に、お互いの生活に支障を来たさない程度の親子間の相互の助け合いである。結局、別居形態をとる老人家族

が別居形態を維持しなから、しかも同居形態と同じような子との緊密な接触、交渉を持たせるシステムであり、あくまで日本の同居形態とは異つたものである。この形態は親子間の円満を保ち、老人の精神衛生上もきわめてよいものである。しかし、日本がこのような形態をとることは困難である。むしろ同居形態を取りつつ、しかも機能的には別居形態の方向に接近しながら解決を求める姿勢が、日本における三代家族であると考える。

しかし、日本の場合、本質的な老人問題は、この形態の採用と可能とする経済的問題であり、現在の老人の窮乏化の原因が、私的扶養の衰退化と公的扶養の未発達との間のギャップにあり、老人問題を解消する第一の方策は、社会保障の充実以外の何ものでもない。老人は経済保障を公的制度に要望し、子には情緒的安定の保障を要望せねばならない。この両者が充足されれば、老人は家族との関係を円満に保つことが出来、安定した生活が可能となるのである。